

都島だより

発行責任者

上田 英雄

〒143-0015

東京都大田区大森西7-8-25

TEL 03-3731-0812



関東浪速工業会 会報 2006年(平成18年)5月 第33号

事務局 馬江 治喜

〒234-0056

横浜市港南区野庭町696-6

TEL045-841-8885

E-mail umae2@m3.dion.ne.jp

題字デザイン 岡田宏三

NEWS33号

関東浪速工業会・現在会員数◆合計583名

◆M・機械120名、ME・機械電気25名◆A・建築105名◆E・電気・電子工学182名◆C・土木・都市工学55名◆C I・工業化学・理数63名◆L・普通12名◆工専21名

平成十八年度
関東浪速工業会会長「挨拶」

M26 上田 英雄



一月の総会より会長を務めます機械26年卒の上田です。デフレ終結・景気回復といわれている中、増税・年金問題等未だ回復の実感に至らない不安定な世相です。又二〇〇七年問題等、明るい話題が少ないのも気懸りです。

さて関東浪速工業会におきましては、各科幹事の皆様の熱心なご努力により、定例行事・総会・一泊懇親会・見学会・ゴルフコンペ等、順調に計画実行されていることは会員諸兄のご協力のお蔭と感謝しております。一方、会員の加齢と新卒関東在住者の減少により、行事面の賑わいが少しづつさびしくなっているのも事実です。定年後の交友関係の減少と共に矢張り抛りどころとしての同窓会も又楽しいじゃないでしょうか。その為にもどうか皆様の出来るだけ多くの参加が切望される所以です。又この会をより若々しく保つためにも是非ご協力の程お願いいたします。

次に新しい世紀に移って実施している電子メールの利用ですが、本年は特に利用促進の年に出ればと思っております。アドレスをお持ちの方も大勢居られるでしょう。もっと同窓会に公開していただいて、意見の交換・運用に関する提案等に活用されてはいかげんかでしょうか。行事の連絡がよりスムーズに行えると思います。以上、いろいろの申し述べましたが要は関東浪速工業会の発展に寄与すべくよろしくご協力の程お願い申し上げます。最後に会員諸兄のご活躍とご健勝をお祈り申し上げご挨拶いたします。

関東浪速工業会の
総会・懇親会に出席して

ME37 川原 敏男



関東浪速工業会の平成十七年度・総会・懇親会が平成十八年

一月二十八日(土)に開催された。浪速工業会本部より森田理事長、岩地広報部長、都工秋山学校長の御来賓を迎え、出席者は四十三名で昨年に比べ多少多かった。総会は十七年実施状況報告、十八年度の実施計画・役員選任が了承された。秋山学校長から学生科学研究部門の文部科学大臣賞の受賞、就職・進学状況、クラブ活動等の御紹介があった。その後、懇親会に移り、校歌の合唱、各科の動き等の紹介、会員相互の歓談も盛況のうち懇親会はお開きとなった。総会・観劇会、見学会、ゴルフコンペ等の行事の状況については会報「Mニュース」で周知されているが、ME科からはこれまで出席者はなかった。それで今回、私は永年勤務した会社を昨年リタイヤした事、そして総会・懇親会が歴史的建物の鳩山会館で開催される事等から初めて出席した。今回は本部より私と同じ機械電気科卒の岩地氏(ME科41年卒)が参加され来年2月頃に母校百周年として東西合同行事が開催される事を報告された。参加した感想は、もっと早く出席すれば良かったと残念に思った。都工の状況・要望の交換、多様な技術系のOB同志とのフランクな歓談による情報交換の場がこんなに近くにある事を認識した。特に今現在のME科の活躍状況を岩地氏より聞いて本當にうれしく感じた。多くの人々の参加により、一層の有意義な会合になることを期待している。同窓生の皆様、特にME科卒業生の皆様も気軽に出席されては如何でしょうか。

「関東青嵐会の集い」
に参加して

E38 辻 弘明



「関東青嵐会の集い」に初めて参加させて

頂きました。「集い」には18名の方々が出席され、私が生まれる前に「都工」を卒業された超大先輩など、恐れ多い諸先輩方ばかりでした。宴が進み、諸先輩方の近況を楽しく拝聴させて頂きましたが、その中で最も驚かされた事は、全員の方々が今でも何らかのお仕事をされているという事でした。最近「生涯現役」という言葉をよく耳にしますが、まさに「都工」の諸先輩方がそれを実践されている事を目の当たりにして、深く感銘させられました。私も定年後、同じ会社に勤めて一年が過ぎ、「そろそろ隠居かな?」と思っていた矢先の事でしたので、「先輩方に負けないように、もうちょっと頑張ってみるか」と思い直しました。まさに諸先輩方から「元氣」を頂いたのです。改めて、諸先輩方に深くお礼申し上げます。

次回また皆様方の貴重なお話を拝聴できる事を楽しみにしております。今回参加された方々の卒年で、私が一番若い方から二番目でしたが、もっと若い人がこの様な集いに参加してほしいと思います。そして先輩の貴重な経験などをお聞きし、今後の自分の人生に生かしてもらいたいと思います。最後に、幹事の岩崎様、笹治様、竹村様大変お世話になりました。ありがとうございました。 謝辞。



平成17年度 関東浪速工業会総会・鳩山会館にて

母校空襲罹災の記



(昭和二十年六月七日)
「四十四年目の後者」より抄録
M21 金田 龍之介

昭和十七年四月に都島工業学校機械科に入学し、この当時は四年生であった。久保田鉄工所船出町工場に三年生になると、すぐに勤労動員に出動した。その工場が二十年三月十三日の南大阪の大空襲で、烏有に帰してしまふと、一カ月おいて桜島の住友プロペラ工場へ追い立てられて行った。その工場でも六月一日昼間、大空襲にあった。その日は、私が班長で十人ほど、体の弱い学生ばかりでできたグループで行っていて、警戒警報からすぐに空襲警報になり、敵機来襲になった。工具さん達は「ここで一緒に死のう」などと、防空壕の中から笑いながら声をかけたが「こんなところで死んでたまるか」と、みんな工場から飛び出した。爆音がとびかい、高射砲のうちまくられる中を、大地にひれ伏し、壕に飛び込み、とにかく空地めざして走った。何十分かの大空襲が終わり、全員集合したが、一人だけ足りぬ。どこで見失ってしまったか、みんなで探そうということになって、煙のただよう道を、消防隊の邪魔にならぬよう、たどって行った。しばらく行くと、仲間一人が立ち止まって「あれは、あれは……」と言っている。見ると、太さドラム缶ほどもある、爆弾が道の真ん中にじっと寝てござる。こいつは破裂しなかったのか、これからするの……「おい！」とみんなに言っ、そりそり後ずさりをして行った。不思議なもので、猛獣におそいかかられるのを、だましましたし逃げたようなものがある。私はこの時、爆弾の落下音を聞きながら、思わず知らず、空なるものに向

かつて手を握りしめ、救いを求めた。私にははつきりとその時間、あるものを感じ、それにすがったのだ。

戦後に、英語の教師が扇町教会の中路牧師であったので、そのことを話すと「金田さん、貴方がご覧になったのが神です。貴方は神を見たのです。私たちの神はお姿はありませんが、確かに私たちに『あるもの』としての力を感じさせてくださるのです」とおっしゃった。私はしばらく教会へ通ったが、その後は演劇部やアマチュア演劇に行くようになって、足が遠のいてしまった。私が教会に感動して誘った、予科練がえりの学生は、そのまま信仰の生活に入り、今は辻中昭一牧師として活躍している。

その空襲にあつて一週間後、昭和二十年六月七日。朝七時頃に勤労動員先の大丸百貨店へと出かけた。当時大阪市都島区高倉町一丁目一七八一番地に住んでいたが、知覧良昭、川本和男という二人の同級生が我が家にいた。知覧良昭は、両親が九州の都城に疎開していたので、家に来たのであるが、何度かの空襲を見ているので、服を三着も着込み、ズボンも何枚かはいて、その上にゲートルをまいて、ずいぶんデブになっていた。その朝、母が三人に手を振って、出かけるのを見送ってくれた。

高倉町一丁目の停留所から市電で、梅田阪急前に出て、そこから心斎橋へと地下鉄に乗った。大丸の地下工場は八時から作業開始であったが、地下鉄を降りて地上に整列した時、警戒警報が出て間もなく空襲警報になった。緊迫したサイレンが断続して八方から聞こえて来た。大丸の付近は、三月十三日の空襲で焼土と化し、焼け跡に大丸、そして並んでポツンと残っている感じであった。

別に残っていたビルの地下室へ待避した。

やがて、ものすごい爆撃の音がしはじめ、壁がバラバラと崩れ落ちたり、焼夷弾の火花が道路に面した地下室にも降って来た。みんなしつかりしているといつても十六、七の少年だ。「アツ、燃える」と悲鳴をあげる者もいたが、私より二年先輩で、上級学校に入学しながらも、引き続き母校の勤労動員先で作業を続けるよう指示を受けて監督にきていた能沢さんがすかさず「何が燃えるねん」と怒鳴った。焼け跡のビルの地下室ただけに、みんな思わずドツと笑った。その笑いが救いであつたように、落ち着きを取り戻したのであつた。

空襲が終わり、地下室から路上に出た時、東北の空からものすごい黒煙が墨汁の壺を大空の一角にひっくり返したように、湧き上がって、私たちのいる所へも早い勢いでせまってきた。北大阪は私の住んでいる方角であつた。母や父はどうなったか、母はこの時間一人で残っているはずだ。妹は私と同じように、動員で工場に行っている。弟は高津中学校の一年生で登校している。

空襲さわぎで、結局、その後は作業を中止して解散になった。地下鉄も止まっていたので、大丸から御堂筋を歩いて帰った。空は夜のようにどんより曇り、降灰がしきりであつた。ふすま一枚が丸ごと焼けて、灰になって、ふわふわと頭の上から降ってきた。天六あたりから雨になった。知覧、川本と三人で妙に元気な足取りで都島橋を渡り、母校の傍まで来た。学校は鉄筋コンクリートの本館だけを残し、木造校舎も、立派な講堂も焼け落ちていた。警防団員が右往左往し、罹災者がぼろぼろになつてうずくまり、子供や知人を呼ぶ声が、薄暗がりの中に果てしなく続いた。学校の前の防火用水の池に多くの人が死んでいた。医務室の名物おばさん、愛称「ヨーチン」ばあ

と呼ばれた看護婦さんも、この用水池で死んだ。

「とにかく家へ行ってみる」と、私は、覚悟を決めたような足どりで、都島本通から高倉一丁目の方に歩き出し、電車の両側は完全に焼け落ちてくすぶっていた。高倉一丁目の方は、火の気が少ないようであつた。「ひよつとすると、我が家は助かつたかな……」信じられないような話だが、当時一面の焼け野原の中にポツンと焼け残った数軒の家があることがあつた。そんな気持ちを手伝って助かっているかもしれないと思つたのであつた。高倉一丁目の停留所まで来ると、道は完全に焼け落ち、まだ燃えている所もあつて、ピンク色、オレンジ色とうす紫色の炎の幕につつまれて、この先は立ち入り禁止、という標識が目前に自然に作られたような気分をたたえていた。そこへ同じ機械科の福田耕三君が来た。家がすぐ裏であつた。「行ってみよか」と二人で言い、福田君と防火用水槽の水で濡らして火の粉よけにさし、肩を抱き合せて走った。夜店通りまで来た「君は左へ曲がれ、また十分後にここで逢おう」と約束して別れた。(次号へつづく)

紙面の都合により掲載を分割させて頂きました。続編は次号Mニュースにて掲載予定です。(編集担当)

観劇会「あんない

金田龍之介氏出演の観劇会を左記の様に計画しました。多数のご参加をお願い致します。詳細は事務局へお問い合わせ下さい。

開催時期 平成18年10月(予定)

題名 米倉涼子主演「黒革の手帳」

開催場所 明治座

参加費 未定

問合せ先 事務局 馬江 治喜(E36)

TEL・FAX 045-841-8885

Eメール uma2@ms3.dion.ne.jp

四月の空

(後編)

C20 白井利一



写真は高く、海は青く、空は白く、空襲の犠牲者であるC20の姿が写っています。その姿がC20の真実を伝える重要な証拠として残されています。



写真は高く、海は青く、空は白く、空襲の犠牲者であるC20の姿が写っています。その姿がC20の真実を伝える重要な証拠として残されています。

(M ニュース32号より続き)

空襲機の侵入にも、東京は無警報無防禦でまさに不意打の状況に似ていた。被害現場の他では、飛ぶ敵機を見ても気づかず「魚雷のような新鋭機だ」「ピカピカ光る機体が頼もしい」と日米機の識別もお寒いものだった。投下された焼夷弾は二種で、モスグリーン色の長さ直径は六十×十(c)と三五×五の六角形で、混合が空中で散って落下、その衝撃で蓋が開き、中から油脂と布が飛び出して引火するエレクトロン焼夷弾である。昭和十二年に防空法が施行されたが、当時は夜間の灯火管制ぐらいだったが、日米戦や空襲もあって十八年頃となると主婦も動員されての演習が日常化となった。しかしその頃の空襲想定は「敵機数ハ二十機以内、一機ノ投下量ハ一トン程度(B二九機は四トン)デ焼夷弾ハ体当リデ消火デキル」とこんなものであった。初空襲による東京の被害報告は、被害家屋二五二、死者三九人、負傷者三二一人、爆弾・焼夷弾数は千数百発となっている。

して東支那海に脱去して、中支の麗水飛行場(中国軍)へ辿るまで難渋した。地理上の不安、燃料の不足、疲労、迫りくる夜。遂に燃料切れで降下脱出、無理な強行の不時着や、失敗着陸の機体破損など、最悪の機は迷飛行のあげく、南昌飛行場(日本軍)に着陸し捕虜となった飛行士たちは後に、学校や市街を無差別爆撃した罪状で処刑され戦死者となった。ただ一機は、日本から北進してソ連へ飛びウラジオオストックに着陸して抑留されているのが理由不明だが、もし故障等で中国まで飛行不能なら、コース変更で日本海を越えれば七〇〇キロの短縮になるので作戦の中に組みこまれていたのかも知れない。この爆撃行は目的を達していながら、帰還での人員と機体に少なからぬ損害を生じてしまった、けだし戦争であった。日本にとって、この初空襲は被害が少ないが東京から主要都市へと本土を縦断した全敵機に逃げられた。敵機は一機たりとも、本土へ入れぬ」と鼓吹されていた防空態勢が崩されて軍は面目を失ったが、「鬼畜米機の爆撃にも、勇敢なる防火活動により損害は軽微なり」「皇室には御安泰にわたせられる」とあまり詳しい報道はされなかった。被害現場は不発弾は回収と整理で立入禁止と緘口策がとられた模様であった。

緒戦は日本の勝利で華々しかった。南方要地の占領と進駐で士気が昂揚の頃は、アメリカにとつても苦慮の日々であった。負けムードを一新して国民に伝えるべく策されたのが「日本初空襲」であった。陸軍の爆撃機を、海軍の空母で運んで飛ばすという軍の常識には無い発想を決定してしまった。それに日本の防空体制も未知のままに。日本流に云えば、特攻的、アメリカでは、冒険精神、になるのであるうか。だが、両国の違いは搭乗員の生還を期して立てられている事だ。難度な攻撃目標を避けての市街地である。空襲地点は東京の中心の西に続く地帯として、上空からは指呼の地点に陸軍省・参謀本部 航空本部・機甲本部・大本営陸軍部・航空総監部・士官学校・軍科学研究所などの中枢の建物が結果しているのに素通りしたのは、戦果を上げる事より全員と機の帰還がアメリカ国民を鼓舞すると期したのであるうか。出港の時、空母にジョン・フォード(映画監督)を乗組ませて出撃シーン撮って国民にPRと懸命であり、徐々に反撃態勢に移り初空襲の気運が結ばれた。その後は、二年半にわたり日本への空襲は無かったが、やがて長距離型B二九機の完成と空軍基地の確保によって、日本本土の各地への爆撃は熾烈に終戦の前日まで続いた。

隊長を務めたジェームズ・H・ドゥーリトル(中佐)は、後に欧州戦に赴任(司令官)しドイツ本土に日本の八、五倍の爆撃を敢行して戦いを終焉に導いた。彼は日本の初空襲の当時、日本側は海外放送で彼の名前をもじって「DO LITTLE」「小っぱけなこた」と軽視の態度を示したが、やがて後からはDO MUCH MORE(もう、たくさんだ)の空襲災を被った。先年、ドゥーリトル氏の訃報を新聞で知った。彼の人評「向こう見ずの 飛行機乗り」は九十六歳の天寿を全うした。

平成四年二月、新聞の下段に小さな外電記事があった。見出しの文字は「東京空襲の米兵救出の中国の五人の恩人 記念行事へ招待」とあり、その記事を抜粋する。「上海十三日(中津幸久) 太平洋戦争回線の翌年、始めて東京を空襲し、中国大陸に不時着した米軍機のパイロット六十人余りを救助した中国人たちが見つかり、この中の五人が来月、米国で開かれる「五十周年記念行事」に、命の恩人、として招待されることになった。招待されたのは浙江省の劉芳橋さん(八五)ら五人。上海紙文匯報によると、一九四二年四月十八日、東京を空襲したB二五爆撃隊は、燃料不足など機長はパラシュート降下を命じ、浙江・江西・安徽の各省へ脱出不時着した六十六人が中国人が救助して、米国に送り届けられた。

この空襲での初の犠牲者となった、早稲田中学の生徒K君こと、小島茂君は五日後の二二日に、学校の講堂にて「報国団葬」にされ、翌年には碑が建ったが、戦後に、国策に利用された、として除去されてしまった。あの四月十八日、同じ中学生として君は校庭で、私たちは校の勤勞奉仕中で初空襲機との遭遇であった、君が禍にあわず存命していたら、私たちと同年ぐらいであろう。現在も早稲田高校資料室には、焼夷弾とサツシに残る弾痕が保管されている。昭和五八年、当時の級友たちが小島茂君を悼み偲んで、校内の一週に碑石を再建した。在校生によって、命日には献花されている。平仮名で「いのり」が碑の文字である。

【あとがき】 初空襲の日、偶然に敵機を目撃した記憶も、失われんとしています。この項末年初空襲の戦録は少なく、蒐集してきた断片を綴り合わせてみると五十余年の感慨ひとしおであります。(平成七年・戦後五十年記(戦後、五十年の春)自稿後の二年余に「日本初空襲」の著が発行され、その写真を参考に付します。

【第20回】 昨年秋と今年春の二回のゴルフコンペが開催されましたのでご報告します。

【第21回】 平成17年11月11日(金) 日時 平成17年11月11日(金) 場所 大厚木カントリークラブ(桜コース) 戦績 参加13名 優勝者 C43 片桐 幸三氏

【第22回】 平成18年4月17日(月) 日時 平成18年4月17日(月) 場所 御殿場ゴルフ倶楽部 戦績 参加11名 優勝者 A28 岡田 宏三氏



大厚木カントリークラブにて

【E36 竹村 繁幸】

一泊懇親会報告

E36 馬江 治喜

今年もゴルフのコンペにあわせて四月十六日(日)に一泊懇親会を開催しました。開催場所は、C43卒片桐氏のご協力を得て、西熱海ホテルで開催致しました。今回は例年参加されているメンバーがやむを得ない用事で欠席されて少々寂しい感がありました。自己紹介、カラオケ、部屋での二次会と、例年に無い盛り上がりで、楽しいひとときを過ごすことが出来ました。翌朝はゴルフ組を見送ったあと、希望者で起雲閣を見学して、昼頃熱海駅で自由解散と致しました。



宴会場にて



西熱海ホテル玄関にて

参加者 C18/9太田、C18秋月、A25西阪、M26上田、A28岡田、L29小川、M36西村、E36竹村、CI39藤田、CI40菅家、C43片桐、A57信原、E36馬江 計13名



見学会のお知らせ



三菱みなとみらい技術館

例年恒例の見学会は、「三菱みなとみらい技術館(横浜市西区)の見学を左記の様に計画しました。ご家族等同伴者の参加も大歓迎です。多数のご参加をお願い致します。

集合日時 7月22日(土)13時30分
集合場所 JR桜木町駅改札口

参加費 入館料・一般300円、中学生200円、小学生100円、65歳以上無料

申込締切 7月15日

申込方法 参加希望者は、科卒年、氏名、参加人数を電話、FAX又はEメールにて左記迄お申し込み下さい。

申込み先 事務局 馬江 治喜(E36)
TEL・FAX 045-841-8885

Eメール uma2@m3.dion.ne.jp

桂米左氏 東京公演の予告

落語家桂米左氏(A59卒)の東京公演が今年も左記日程で開催されます。入場券の入手方法等については左記事務局までお問い合わせ下さい。

開催日時 10月13日(金)19時開演

会場 千代田区立 内幸町ホール

東京都千代田区内幸町一五二

入場券 金額未定

問合せ先 事務局 馬江 治喜(E36)

TEL・FAX 045-841-8885

Eメール uma2@m3.dion.ne.jp

関東青薔会よりお知らせ

陶芸教室へのお誘い 2006



2005年陶芸会参加者の秀作?!

恒例の関東青薔会主催・陶芸教室を今年も陶芸家として活躍されているA46卒柚木寿雄氏のご好意にて開催する事となりました。他科の皆さんの参加も大歓迎です。奮ってご参加下さい。陶芸が初めてという方も、柚木氏とスタッフの方のご指導により楽しんで取り組んでいただけます。

終了後懇親会開催

開催日時 9月30日(土)13時より17時30分

開催場所 国立市「国立自由工房」

費用 7,000円(懇親会費含む)

定員 二十二名(定員になり次第締切)

申込締切 8月31日(木)

申込方法 卒科・年・氏名をFAX又はEメールにてA37森芳信まで

FAX 04-7184-8443

Eメール 3tree-yoshi@jcom.home.ne.jp

(集合場所等詳細は申し込み後、案内します)

会員著書の紹介

事務局より

現在事務局に関東浪速工業会の会員の方が執筆された著書を常備してあります。閲読を希望の会員の方は、事務局までお申込下さい。なお、著書の郵送代金は閲読希望者の御負担とさせていただきます。また、今後も会員が発行した著書や母校の歴史等に関する書物を、当会へ寄付(希望

の方は事務局までご連絡お願いいたします。

【事務局保管書物一覧】

ジャワ派遣部隊 宣伝班従軍記

E14・松尾嘉雄氏著 ご本人より寄付

回顧録 わが変容―ビジネスから折字へ

M18/9・片井振武氏著 ご本人より寄付

死へのさすらい マニラ東方山岳戦の記録

A13・奥山清治郎氏著 E16・戸部氏より寄付

都の華 第5輯 温故智新 石井一郎氏著

M26・上田氏より寄付

都の華 第6輯 神々の世代 石井一郎氏著

M26・上田氏より寄付

問合せ先 事務局 馬江 治喜(E36)

TEL・FAX 045-841-8885

Eメール uma2@m3.dion.ne.jp

次号のMニュースは平成18年11月発行予定です。

訃報

M20	宮嶋 信夫氏	平成17年12月22日
M20	藤井 昭康氏	平成17年2月
M大正12	河南 貞夫氏	平成17年1月1日
M10	松本 秀典氏	平成16年7月29日
M27	西村 秀美氏	平成16年12月
E17	落合 治氏	平成17年11月16日
E29	奥田 治氏	平成17年4月5日
工専M22	水野 誠氏	平成17年10月21日
A29	結崎 東衛氏	平成18年1月8日
A37	種橋 重次氏	平成18年2月19日

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。